

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成21年9月号

平成二十一年九月一日発行 第十九巻第九号 通巻第二一九号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



万  
緑

高橋将夫

緑陰の深さは風が知つてをり  
美しき殺生の火の蚊遣りかな  
咲いてよりサルビアの色濃くなれり  
炎天の坂道を来て次の坂

だます気はなくて天道虫だましが  
ががんぼの足と蜥蜴の尻尾かな  
夏霧を吸ひし艶なり歓喜天  
一筋の灌にゆるみのなかりけり  
万緑は闇を抱へてをりにけり  
心にも夏袴にも襞のあり  
甚平着て最後は勘を頼みとす

「俳句界」(文學の森)八月号より三句

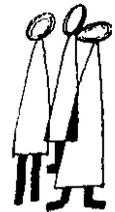
# 槐安集

水野恒彦

雲の峰放念といふ静けさに  
喪ごころやきらきらと蛾の金粉  
人寰や虹消ゆるまで見つくせり  
首すじにほうたるの来し最澄忌  
逢へぬ日のろくぐわつ孔雀翹ひろげ

延広禎一

雲海に渦巻き上ぐる増長天  
賓頭盧の臍より出でし道をしへ  
宇宙食を所望したりき三尺寝  
噴煙や乱を好みし墓  
男時とは地酒と茄子の一本漬



加藤みき

新緑や顔にまだらの日のひかり  
梅の実の上に震へる水の玉  
もう少し降つておくれよ梅雨の雷  
尺蠖の足音じつと聞く大樹  
日盛や主の安配聞かれをり

石脇みはる

時なしに不将千万夏の雷  
青葉木菟落葉の中にかさとをり  
紫陽花の色別院をへだてけり  
大いなる芭蕉の花のめくれあり  
七月の山の祠に赤い飯

中島陽華

やんちやくれの天馬なりしか花槐  
つつつぽの肌になじみ花芭蕉  
七変化鯉のあらひとなりゐたり  
目ぢからや新玉ねぎに芯ありき  
ヒマラヤの青き罌粟咲きユートピア

栗栖恵通子

ほうたるや手拭ひ固く絞りをり  
匂玉になりて漂よふ熱帯夜  
水無月のお七の小袖祀らんか  
夏旺ん正座にこぶしありにける  
黒南風や姥をおぶうてデンドラ野

竹内悦子

人の世に猫も来てをる円座かな  
押入れに花莫塵敷いてありにけり  
どくだみの花のひとつは木戸の外  
走り梅雨こむら返りとなりにける  
怪士と般若の面や夏袴

大島翠木

小面の眠りや深き螢の夜  
片白草翳といふ字の羽音かな  
青空を鏡に天おやまれんげ女花たたり  
コピー機の吐き出すあやめどきの黙  
靴底の片減りを干す青蜥蜴

雨村敏子

竹皮を脱ぐやこの世のはじまりぬ  
青萱のまだ濡れてゐし茅の輪かな  
蛇やなかなか抜けぬ蔵の鍵  
満開の牡丹に風の動かざる  
磐石の苔生す劫や河鹿笛

小形さとる

礼者一人しづかに転ぶ夏祓  
舌でさはる漆黒の闇源信忌  
真命まいのちに足頸はあり練供養  
宵闇魔みな雄鶏の貌をして  
松藻虫切といふこと吾に遠し

本多俊子

夏衣ルオーの黒をまとひたる  
蛇苺ここよここよと言はれても  
六月の大きな穴をのぞいてる  
生も死も力むことなき海月かな  
杜若未明の橋を渡りけり

久津見風牛

走ることいつしか止めし麦の秋  
天牛をはがしそこねし雲の峯  
青瓢の棚の下なる草に風  
桑の実や母娘の話に近付けず  
大吟醸たしかに墓ののどぼとけ

近藤 きくえ

列なして研修医たり新樹光  
薄衣書院の隸書すらすらと  
青葉悼闇吟詠のこゑ今もなほ  
さやさやとモールス通信夏燕  
万緑をかけたのぼりくる豆剣士

近藤 喜子

矢車草ツタンカーメン王にかな  
歳月の止まりたるまま水中花  
青き星に触れたる思ひ夏衣  
岩つばめ空中都市を築きけり  
若者ら灯蛾となりぬ夜の河原

谷村 幸子

立葵の花にみとれて木椅子かな  
法螺の音や青葉の中の稚児大師  
桔梗の咲いて大護摩供養かな  
虫干の晴着に孕む昼の風  
温かき言葉かずかず蓮の花

瀬川 公馨

みそつ淬のんど流るるバラの蜜  
くまん蜂の入れ墨の針止めむと  
輪の中にのつぼの鬼さん桐の花  
ぬけぬけと帆待ち仕事や大でまり  
蚕豆の踊りつづける釜の中

# 槐市集

桑原逸子

柿若葉木椅子二つの置かれある  
行先は 浄土平や 夏霞  
戒名は読めずともよし青葉風  
乗り込みし坊ちやん列車麦の秋  
甘酒や月日ゆつくり移りける

近藤公子

蓮咲き水面に産声ひろごりぬ  
蝉の幼虫Tシャツの胸登らせて  
青梅や海平らかに昏れゆけり  
花桐や 大八車坂を来る  
それとなく匂はせてみし夏薊

近藤紀子

桑の實の黒きは高き枝にあり  
老鶯の B G M なり當麻寺  
鎌足の密談の聲繁りより  
えごの花山肌荒るる裏大山  
梅雨曇るみ佛の顔木目美し

柴田靖子

古希すぎて手渡されたる落し文  
それなりに心に残る草いきれ  
のうぜんの花にまどひて友の家  
まひまひの輪に吾が影の見えかくれ  
夜毎なる火取虫来し羽音かな



# 槐集

## 高橋将夫選

水と火と風を操る女鵜匠 守口 柳川 晋

どの祭囃子も身には付かざりき  
饅飯に水かけて食ふ楽土かな  
くちなはとして蛇の道を踏み外す

遊星の一期蜘蛛の囿の一会かな

蒲の穂やこころの軸を立てなほす 枚方 富松 寛子

水番の影にみなぎる力かな

草刈つて道現はれし天野原

藻の花や内なるちさき阿弥陀仏

指先にからむしがらみ青山椒

舍利塔を染めて紫陽花虚空かな 東京 西村 純太

飛白にて南無阿弥豆腐と破夏の僧

黄泉の風吹きだすところ蛇莓

螢火と鬼火ともつれ逝きにける

点滴の袋の中の金魚かな

和中散本舗の梁の燕の子 守口 岩下 芳子

蟾鳴いて大池の面揺ぎたる

花芭蕉の甘き蜜舐む昼日中

刀匠の道場なりし夏館

わくわくと大紫陽花の真白かな

大和塀を鎌で指しをる草刈女 枚方 近藤 紀子

夏兆す石の肌や明日香風

院庄あたり雲濃しえごの花

雲中菩薩梅雨の晴れ間をかるやかに

産土や四葩咲く日の船神事

クレーンの掻き混ぜてをる油照 寝屋川 前田美恵子

反抗期すでに過ぎたる茗荷汁

還暦の退屈凌ぎ心天

郭公やときに沈黙ありにける

引力に逆らうてをり山棟蛇

# 銀河往来 高橋将夫

水と火と風を操る 女鵜匠 柳川 晋

〈おもしろうてやがてかなしき鵜舟哉 芭蕉〉

鵜飼には秀句が多く、詠み尽くされた感がある。ところが、掲句はそんな思いを吹き飛ばしてくれた。風にゆらぐ火、川面に映る火：鵜飼の全景が実に鮮やかに浮かび上がる。鵜を操る鵜匠を「水と火と風を操る」と捉えたところがまた素晴らしい。さらに、女鵜匠ということ、鵜を操るしなやかな紐のさばきが眼に浮かんでくる。…だんだん女性の恐さを詠んだ句に見えてきた。一度操られてみたいという誘惑にかられそう。いや、既に操られているのかもしれない。

次の句なども発想がユニークで、内容に深みがある。

〈くちなはとして蛇の道を踏み外す 晋〉

〈遊星の一期蜘蛛の罫の一会かな 晋〉

蒲の穂やこころの軸を立てなほす 富松 寛子

蒲は盛夏になると二メートルにもなった茎の先端に円筒形の穂のような花をつける。頭でつかちで、不安定そうに揺れながら、やがてゆれ止まる。そんな蒲の穂を見ながら、くじけないで、気持だけはしっかり持とうと作者は心に決めたのであろう。

〈草刈つて道現れし 天野 原 寛子〉

螢火と鬼火ともつれ逝きにけり 西村 純太

人の死に鬼火といつても、さして驚くことはない。しかし、そ

こに螢火がからむと様相は一変する。妖しさが妖艶に変わる。鬼火ともつれた螢火の正体は何か。そこから物語が始まる。

和中散本舗の梁の燕の子 岩下 芳子

和中散本舗は旧東海道沿い、栗東市六地藏に現存する間口の広い大きな商家。「和中散」は腹痛や暑気あたりによく効くと言われた薬。そんな商家の梁にいる燕の子だから、きつと元氣すぎるくらい元氣なのだろう。この燕、なんだか薬の匂いがしてきそう。

夏兆す石の肌や明日香風 近藤 紀子

初夏の明日香を散策していて、ふと石に眼がとまった。どうやら作者はその石の肌がいたく気に入ったようだ。「夏兆す」と「明日香風」から私はサラリとした爽やか肌を思い浮かべた。

クレーンの掻き混ぜてをる油照 前田美恵子

炎天に高層ビル建築のクレーンが立っている。まさかクレーンが空を掻き混ぜるわけではないが、そう思いたくなる程の猛暑なのだろう。この暑さ、もうこれ以上掻き混ぜないでくれと思わず叫びたくなりそう。クレーンに対して油照がよく効いている。

風鈴や湯気の厚揚げ黄金色 中野 京子

いかにも涼しそうに風鈴が鳴っている。そんな時に、まだ湯気の立っている出来立ての厚揚げがきた。ただそれだけの景ではあるが、風鈴の涼しさと黄金色の厚揚げの取り合わせの妙は、筆舌に尽くしがたいものがある。(以下略)